

研修報告書

自民クラブ 柴田雅也

1 日 に ち	令和2年1月17日（金）
2 視 察 先	日本地下水学会セミナー『災害時における水の確保—地下水利用の現状と課題をさぐる—』
3 参 加 者	玉置真一・柴田雅也
4 研 修 内 容	<p>1)国土強靱化計画に基づく震災時の地下水利用に対する考え方 地下水の保全と有効利用を実現するための規制基準</p> <p>2)SIPの研究対象地域である濃尾平野における地下水研究事例 （内閣府 戦略的イノベーション創造プログラム 「国家レジレンス防災・減災」の強化）</p> <ul style="list-style-type: none">・濃尾平野の扇状地河川からの地下水涵養・流動特性・地下水を持続利用するためには？・地下水涵養量と揚水量の量的バランス管理 <p>3)濃尾平野の地盤沈下を考慮した適正揚水量の検討事項 地下水の有効利用</p> <ul style="list-style-type: none">・環境用水と災害時応急給水のシナリオ・平時は環境用水としての利用・災害時に生活用水として利用・指定された避難所に新たな井戸を設置 <p>4)熊本地震の経験と教訓</p> <ul style="list-style-type: none">・災害時井戸水提供における体制・災害時に井戸水を利用できるように要望・企業と協定 災害用井戸・災害時における井戸水の提供に関する協定 <p>5)秦野市における被災時地下水利用の準備状況</p> <ul style="list-style-type: none">・避難所に災害用非常用井戸・マンホールトイレ：流すための水の確保・条例に基づく民間井戸 900件：災害については明記していない・災害時の水の確保、災害時協力井戸の家「なでしこ防災ネット」・地域コミュニティ—使う名人、育てる名人、守る名人、伝える名人 <p>6)健全な地下水資源活用のための提言 —東日本大震災での井戸の被害状況—</p> <ul style="list-style-type: none">・井戸は異常が無ければメンテナンスする必要がない・災害が起きると避難所などでトイレに多くの人困る・地域防災計画における地下水利用の優位性・プールの多くは壊れ、プール水は活用できない

【玉置真一】

「天災は忘れたところにやって来る」ではなく、

「天災は必ず来るから備えましょう」を基本と考える。

東日本大震災、熊本地震、北海道東部地震など、また近年の豪雨災害など多数災害が発生しております。

この様な災害発生時生活用水をどの様に迅速に確保するかが非常に重要になっている。

阪神大震災では緊急の生活用水源として井戸水が大きな力を発揮した。災害対策として取水場(深井戸、浅井戸、湧水、伏流水)配水場、送水ポンプ、浄水場等の設置状況、耐震化状況、自家発電装置等施設を確認しデータ化している例が有る。

多治見市も民間企業での地下水利用、一般家庭での井戸登録データが有ると思うが被災時における水の提供に関する協定の締結等、非常用生活用水源、飲料水としての地下水利用はどうあるべきか、また迅速な水質検査体制など今後専門家や自治体関係者、民間企業、市民の皆様と共に考えていく必要が早急に有ると感じた。

【柴田雅也】

大災害が発生した直後に大きな問題としてインフラにどの程度の被害があるか？また、復旧にどの程度時間がかかるか？は重要なポイントである。一刻も早い大災害発生前の住民生活に戻すべく再建に取り組まなければならない。

その中で特に上下水道の復旧は住民生活にとって切実である。

大災害によって上下水道施設に大きな被害があった時に復旧に長い時間がかかる状況に陥った場合、どのような代替対応が講じられるか？を行政としての方策として常に考えておかなければならない。

東濃地域の取水はほぼ90%以上を東濃用水に依存し、各市は配水している。現在、大災害に備えて東濃用水送水管や上下水道管渠の耐震化に取り組まれているが毎年、耐震化できる延長距離は予算面において限られており、長い年月がかかる。そのような中で地下水の活用は重要な視点であると考えます。

今回の研修において参考になったポイントとして「国土強靱化計画に基づく震災時の地下水利用に対する考え」と自治体の取り組みであった。熊本市は熊本地震の経験から「災害時井戸水提供における体制」と災害時における井戸水の提供に関する協定」についてであった。

秦野市ではマンホールトイレで流すための水の確保が必要である事から「避難所における災害用非常用井戸の整備」や災害時協力井戸の家の確保のために民間NPO団体「なでしこ防災ネット」が取り組む官民協働であった。また、主体的に活動する地域コミュニティとして地下水の大切さについて平時から「使う名人、育てる名人、守る名人、伝える名人」が活動する取り組みについては大いに関心を持った。

いずれのしても現在は地下水に頼らなく済んでいても、地下水をいざという時に活用できる体制の構築に取り組むことが市民の安心につながることは大きな視点ではないかと思う。

5. 所感、主な質疑の内容、
提言事項、課題等